

Bouquet

ブーケ

(Newly written)

名) 花束

名) 種々の花の匂いを混合した香水

名) 祝辞

二人の場合

「髪、のびたね」

「ああ。まあ」

スレインの指が自分の後頭部を一度梳いた。毛先が肩口で跳ねている。

「切る？」

前髪が目にかかって鬱陶しそうだ。スレインの左手が髪を耳に流した。ちよつと色つぽい。朝から。

食事の途中だった。朝食に目を落とす。早く食べよう。冷めてしまう。

「いや、まだいい」

「ふうん」

皿の上で目玉焼きを切り分ける箸の動きが目に入る。美しい手の形だ。こうなるまで、随分練習したんだ。

「伸ばしてるの？」

「え？」

「髪」

「ええと…まあ、そうかな」

「そう」

前髪が長いと目や耳が隠れるし、そこはちよつと残念だ。
でもまあ。

自由になるものは、自由にしたらいいか。

「…変か？」

スレインが聞いた。伊奈帆はこの会話は終わったものだと思つていたので、目を丸くして見返してしまつた。顎を引いて様子を窺っている。白米を咀嚼しつつ、スレインの髪の長さについて考える。

肩のあたりまで伸びた髪。毛束の多い癖のある髪。かつての。敵だった頃なら、白い獅子のような印象を持つたかもしれない。

腹に響く声と張り詰めた糸のような立ち姿。逸らすことができない燃える氷の瞳。世界を揺るがすけもの。

波の音。

潮の匂い。

濡れていた。

照準を合わせた先。

風に吹き荒ぶ月の色の髪。

引き結ばれた口の形。白い額。

そこを撃つこともできたのだ。僕は。

我に返って前を見る。その男も、今は穏やかな表情で朝ご飯を食べている。一緒に。

長い髪。

膝頭を開いて座る、少し行儀の悪い足。箸を持つ手。弧を描く唇。

温かい、優しい眼差し。

毎日、当たり前のように呼ばれる自分の名前。その声の円やかさ。

細い金糸が束になって顔を縁どり。

金色に鼻を埋めると深い森と口に苦い花の匂いがして。

故郷って言葉が浮かんで。

なぜだかいつも、泣きたくなる。

それを知ってるかな。

長い髪か。

窓から差し込む朝日で輝いている。

地球の光を集めて糸にしたら、きつとこんな色だろう。

変じゃないし、悪くない。

なんだろうな。

「君の髪を切るの好きだから。切らないのかあ、と思って」

「そうか」

軽い声で返事があった。今のは、言いたいことが上手く伝わらなかったような気がする。

「長いのも好きだから」

そう、好きだ。どんな髪でも。どんな君でも。

「あの…」

「ん？ 何？」

スレインの手がまた後頭部の髪を梳き、毛先が肩の前に揃った。

首が隠れた。

ちよつと不安になる。あれを隠したいのだろうか。だから長く伸ばしているのだろうか。

「その…。君はよく、…ええと、その…、髪を。…触る、だろうか？」

「うん」

「その…僕はそれが、…結構好きなんだ」

ガタタツ。

「…なんで立ち上がった？」

「…いや、何でもない」

「…でも、短いと、すぐに手が離れてしまうだろう。だから…」

伊奈帆は額を押さえて目を閉じた。今の言葉を何度も反芻する。好きって言った。触られるのが好きって。

いい。

いい感じた。しかし朝っぱらからそんな可愛らしいことを言われてしまつては、今日一日どうしたらいいのだろう。

「…まいった」

「何？」

にやけてしまう。間抜けな顔に見えるかも。まあいいか。どうせここには二人しかないのだから。

「いや…あのさ」

「うん」

「やったことないから、多分下手だと思うんだけど…そのうち上手くなるからさ、髪を結ばせてよ」

「え？」

「わかった。髪を切りたいんじゃないで、髪に触りたいんだ。僕は」

スレインが間拔けな顔をして、口をぱくぱくさせてから顎を引いた。目つきの悪い上目遣い。難しい顔を装っているが、分かる。これは照れている顔だ。

「…お前。恥ずかしいこと言うな」

「そっちだって、相当恥ずかしい。顔赤いよ」

「…お前の方こそ耳が赤い」

噛んだ米は甘い。照れ隠しに、噛む速度が速くなる。箸の先の白い米はつやつやとしていた。

そういえば、いつからだっけ。おにぎりじゃなくて、茶碗で食べるようになったの。

スレインが。

箸が使えるようになってからだっけ。

吐かずに食事ができるようになってからだっけ。

同じ時間に座って食べるようになってからだったかな。

「お茶、飲む？」

湯呑に急須を傾けると、ありがとう、と聞こえた。

「ようし。元気が出た。行ってきます」

「伊奈帆」

袖を引かれて屈むと、細い金糸が鼻にかかった。甘い香りとしよっぱい味。

やっぱり、前髪くらいは切った方がいいかもしれない。

「…いつてらっしゃい」

「…うん。早く帰るよ」

「いつも通りでいい」

帰りに、果物とパンを買って帰ろう。明日は土曜日だから、ゆっくり起きて朝はサン
ドイッチでも作ろう。ああ、花も買おう。前に花を買ったのは結構前だ。あと、リボ
ン。何色にしようか。

エーリス・ハッキネンの場合

「久しいな。界塚少佐」

「ご無沙汰しています。ハッキネン元中將」

退役軍人と青年将校は、疊の応接間で向き合っていた。二人で使うには広すぎる空間だ。

まあ、狭いよりはいい。

「悪ないか」

「はい」

「まさか、十年以上も君が耐えるとは思わなかったよ」
日本風に整えられた中庭から、蟬の声がする。

無数の小さな生き物の叫びを、煩いとは感じなかった。

「今日は、お願いがあつて来ました」

「何だね」

上官は、退役して皺が増え目元が丸くなったようだ。心配そうな表情を覗かす様は、好々爺に見えなくもない。

「病院を都合していただきたいのです」

「その目か？　ずいぶん経つが、後遺症か？」

「いえ。パートナーの方です」

「ああ。何だね。病気か？」

素っ気なく言って湯呑を持ち上げたハツキネンに伊奈帆は言った。

「いえ。子どもができたので」

茶が零れた。言うタイミングが悪かったかもしれない。

「…何だって？」

「多分ですけど」

「…子ども？」

「前のヒートから四か月になるし、食べ物の好みが変わったから…」

滔々と話す伊奈帆にハッキネンは手を広げ振った。言葉を止める。

「…待て待て。あれは、生殖能力を失ったのではなかったか？」

「物みたいに呼ばないでください。僕の番です」

「…は？」

「報告が遅くなりましたが、一年ほど前、番になりました。できれば、そちらも処理をお願いしたい」

蝉の声。鹿威しの音がその中に紛れ、数度響いた。

「なぜ報告しなかった？」

「確証がなかったので」

「…言葉もないよ」

「今のままでは学校にも、通えないですから」

老年の元軍人は眼鏡を取って天井を見上げた。モニタ越しに見たことのあるジェスチャーだが、以前と全く違う感情を抱いた。

「何というか。…君も、親になるんだな」

伊奈帆はくすりと笑った。

「あなたのおかげでもありますよ」

「何？」

「当時、僕はただの友人でしたから。あなたや周りの人は勝手に色々想像していたみたいですけど。一緒にチェスをして、話をして。それだけです」

今はもうない独房に懐かしさを感じた。小さなベッド。端と端に座って、必死に言葉を選んで。

若かった。子どもだった。がむしやらだった。何をどうしていいかなんて、わからなかった。

鮮明に覚えている。白い包帯の巻き付いた首。向けられる目。耳に届く言葉。傷ついているはずなのに、平静を装って。痛かったはずだ。怖かったはずだ。そして、孤独だったはずだ。彼にとって生きていくということ、生きていくということは、苦痛と不幸でしかなかった。それをずっと見てきた。救われる日が来るなんて、奇跡に思えた。

「そうなのか…」

「一緒に暮らすようになって、好きになっていました。家族というものを持つことができるのは、嬉しい。僕もあの人も、あまり家族…特に両親のことを知りませんから」

「そうか」

「はい」

ハツキネンが大きく頷き膝を打った。古めかしいジエスチャーだが、分かりやすい。

「わかった。いいように取り計らおう。まかせたまえ」

「お願いします」

茶を勧められ、湯呑を口に運ぶ。氷が溶けた薄い茶が喉を通り抜けた。

「一度、会いに行くよ。その時、色々と必要な手続きをしよう」

「はい」

「謝罪もしたい。手土産は何がいいかね」

なんだかくすぐつたい。でも、貰えるものはもらっておこう。

「果物かな」

「新しい住まいを用意しよう。監視はつくがな」

「お願いします」

「界塚」

「はい」

皺だらけの手が目の前にあった。握手を交わす。

この人と握手をする日がくるなんてな。

「最後になったが、おめでとう。何というか、仲良くな」

「もちろん」

重なり響く蝉の声が、祝福の歌のように耳に優しい。

二人との場合

「髪、結ぼうか」

「ああ……うん。顔を洗ってくる」

「うん」

洗面所から戻ってきたスレインはソファに座って欠伸をした。櫛と髪留めを持って隣に座ると、背中が向く。耳の上から髪を集める。くすぐったそうに肩が笑った。

「伸びたね」

「ああ……そういえば」

ふわふわと膨らむ頭髮は背の中ほどまでを覆っていた。手櫛で集めてから櫛歯を当てる。抵抗なく髪の間を通った。

この猫毛に初めて櫛を通したのはずっと前だ。

何度も訪ねた面会室で。

髪を切るために櫛を通すと、瘦せて荒れた髪は絡まり千切れた。鋏で切った毛は重さがないように床にパラパラと落ち、艶のない髪の毛が鈍く明かりを反射していた。死人のような髪だった。

「伊奈帆？」

名前を呼ばれて我に返る。手が止まっていたようだ。豊かな髪を梳る。

こんな髪が伸びた。

柔らかい髪が手の指に心地いい。

手の中で束になった髪は、一本一本が日の光を浴びて輝いている。

櫛に絡まることは、もうない。

「今日は三つ編みにしようかな」

「何でもいい」

「それか、ポニーテールか」

「好きにしろ」

ソファの背もたれに肘が乗っている。最近は何れることが増えた。裸足の足がフロ―

リングの上でふらふら揺れている。退屈そうだが、機嫌は良さそうだ。

「ねえ」

「何？」

「いや、何でもない」

「変な奴」

一つに集めた髪は頭頂まで持ち上げられるほど長い。もう、こんなに経ったんだ。

「…子どもを、生んだらさ」

「…」

スレインは前を向いたまま。気配だけがこちらを向いた。

「君の髪を切りたいな」

「…なんで？」

「なんだか、髪が長くなるほどに君を遠く感じるんだ」

窓の外、朔風に木の葉が舞い散り、光が笑った。

「馬鹿だな。僕はどこにもいかないし、何も変わらない」

こんな声をしていたっけ。陽だまりのような声。暖かくて柔らかくて、翳りのない声。

「そうかな」

「そうだ。変わらない」

「そうか」

伸びる髪を切ってきた。

何度も何度も座る彼の後ろに立った。

薄暗い部屋で初めて鋏を入れた時。彼の一部を切り取った瞬間。

下から現れた項があまりに頼りなくて。

染み一つ、傷一つない首の後ろ。

白い肌に産毛があつて。

切った髪が張り付いて。

その下の襟ぐりからは、背中のひどい傷痕が覗いて。

白い項が。

あんまり弱く清らかに見えたから。

触れたら壊れてしまうと思った。

そこに、ある日包帯が巻かれた。

ぐるぐると巻き付けられた、血の滲んだ長い布。

光源のない暗い独房で見た彼の姿は首を落とされた亡霊のようにも見え。

硬いベッドの端と端に座り。

声は深く沈み。

目は暗く光り。

理不尽な暴力に晒され続けた体は壊れかけていて。

それなのに。僕は手を握ることも、肩を抱くこともできなくて。

さようなら、なんて言わせてしまつて。

体も、心も。

もう、治らないと思つた。

「ポニーテールにしようかな」

生返事が聞こえる。何かを考えているか、眠いか、どっちかだ。

どこか遠くで鳥が鳴く。室内の空気は暖かい。

櫛と手で髪を上げる。項が露わになる。

白くて細くて、少し汗ばんでいる。

ほら、やっぱり頼りない。

この皮膚の下に、骨があり、血が通い、神経が奔っている。頸椎の中ほどに、触らなければわからないしこりのような部分がある。

ここがオメガのもう一つの心臓。

この器官が命を結ぶ。

滑らかな皮膚に薄つすらと、カーブを描く歯形が残っていた。

お互いがお互いの物になった証。

一つと一つが番となる。

一度だけの儀式。

消えない痕。

この傷が聖者の聖痕のように思えるのは。

そしてそれが嬉しいなんて思うのは、神様に怒られるだろうか。

「もう少し、お前に髪を梳いてもらいたい」

不貞腐れたような声。これは照れ隠しだ。

「うん」

スレインが自分の手を日にかざした。節の目立つ細い指が光を受けるのを、伊奈帆は神聖な気持ちで見つめた。

「その間は、その両手は僕のものじゃないか。悪くない」

光る手に手を伸ばす。届いた。温かい。手のひらをくつつけて握るとすぐに握り返された。

「スレイン。全部だよ」

彼の背筋が震えた。薄手のセーターの下で美しいスロープを描く脊椎。その四番目から香る冬の森の匂い。

「両手だけじゃなくて。全部、君のだよ」

「…そうか」

「もつと独り占めしてもらいたいな」

手を解き、髪を仕上げる。うん。きれいにできたと思う。

「はい、できた」

「…伊奈帆」

馬のしっぽが軽く揺れた。

「…せっかく結ってもらったのに、悪いんだけど」

振り向いた顔は少し赤い。口が笑った。そして目も。

「…今から、その独り占めってやつをしたい」

「…どうぞ」

肩を両手で受け止める。そつと、そつと背中を抱く。あんまり強く抱きしめたら、きつと苦しいだろうから。

髪を切るのもうすぐ。

部下の場合

「おはようございます」

「おはよう」

朝一で仕事をしていると、隣席の上司が出勤した。あれ、と時計を見る。まだ勤務時間よりかなり早い。

「昨日は世話を掛けたね。残業？」

「朝の方が効率がいいかと思ひまして」

「うん、そうだと思う」

自分もそうだが、界塚少佐も時間ぎりぎりに出勤することが多い。今日はお互い珍しい。

「これ」

少佐が紙袋から何かを取り出した。手の平サイズの包みを受け取る。

「何すか？」

「お菓子だけど」

「いや、そういう意味じゃなくて…」

小綺麗にラッピングされた箱を上から下から眺めた。薄いブルーの包装紙に、光沢のあるシールが貼つてある。見ると、デスクに置かれた紙袋には、同じものが沢山入っているようだ。

「結婚したから。その挨拶」

「け、結婚？」

「うん」

相変わらず表情の変化に乏しいが、機嫌がよさそうだ。さらりと言ったが、結婚とは。何も知らなかった。

「あ、おめでとうございます」

「ありがとう」

返事もそこそこに、少佐はなぜか再び紙袋に手をつ突っ込んだ。荷物が多いな、と思っ

たが袋は二つあったのか。

「あとこれ」

「？ またお菓子すか？ なんぞ？」

包みが違う。今度は白の包装紙にオレンジ色のリボンが巻かれた小さな箱だった。

「子どもが産まれたから」

「こ、こ、子ども？」

「うん」

「いつ？ ですか？」

「昨日」

そういえば、この人昨日は休暇を取っていた。

まじまじと両手に乗せた二つの箱を見比べてしまった。これは内祝いというやつか。そういえば、職場の先輩が何かややこしいことを話していたのを見た気がする。自分からしたら青天の霹靂だが、気づかなかっただけかもしれない。

「お、おめでとうございます」

「ありがとう」

少佐が照れくさそうに笑った。相手は噂の年上美人かな。このタイミングなら、聞いてもいいだろうか。

「もう、お付き合いされて長いんですか」

「一緒に暮らして十一年になるかな」

十一年前ならこの人は二十歳前後。噂も結構当たってる。結婚と出産のタイミングが重なったのは、訳ありだろうな。そこはちよつと聞きにくい。

「そうなんすか。おめでとうございます」

「…こんな日が来るなんてね」

少佐にしては珍しく、感情的な言葉と声音だ。この人のことは尊敬していたが、もつと好きになった。背筋を伸ばす。

「おめでとうございます」

「もう三回目だよ。ありがとう。君、いい人だね」

「お子さんは、男の子ですか？ 女の子？」

「女の双子」

「へえ」

「すごくかわいい」

「写真ありますか」

「あるよ。見る？」

スツと差し出された携帯端末を受け取る。ホーム画面がまさにその写真だった。

「目が青？ 緑？ 綺麗な色ですね」

「向こうに似たんだ。顔もね」

赤ん坊の見分けなんてつかないが、白い腕に抱かれた二人は可愛らしいと思った。

「奥さん、見切れてますね」

「…あの人、写真が嫌いなんだ」

ちよつと残念。スマートフォンを返そうと差し出すが、持ち主は口を手で覆い、そっぽを向いてしまっていた。

「…あれ、少佐。なんか照れてます？」

「奥さんなんて言われたことないから、びつくりして」

「あ、すんません」

「いや…」

案外可愛い人だな。年上の上司に、失礼かもしれないが。

「でも、その呼び方はやめとこう。イメージじゃない」

言われて気づく。そうか。女性とは限らないんだ。失礼だったかも。

「失礼しました。じゃあ、えつと。お連れ合い、さん、は病院ですか？」

「うん。一人だと家にいてもすることないから。早く来ちゃってね」

「だから今日は早いんすね」

「あと一週間の辛抱だ。早く帰ってきてほしいよ」

「…」

惚気を聞かされているのかもしれない。

「君、今度遊びにおいでよ」

「俺が？ いいんですか？」

界塚少佐は椅子に座って頷いた。

「上司らしいこと、あんまりしてないし。ご飯でも食べにおいで」

「ありがとうございます」

笑窪の浮かんだ横顔に面食らう。こんな顔させるなんて、どんな人なんだろう。

後日譚

「いらつしゃい。どうぞ」

「あ、どうも（うわめっちゃイケメン）」

「早いね」

「（エプロン：!?）今日はどうも。あ、これ、お祝いです」

「ああ、ありがとう」

「氣を遣わせたかな」

「いえ。あの、お子さんのお名前を聞いていたので」

「先に活かってくるから」

「うん。君もほら、上がって」

「何にしようか、と思っただけですけど」

「嬉しいよ。あの人、花が好きなんだ」

玄関に残った香りを吸い込んで、界塚伊奈帆は笑った。

あとがき

最後まで読んでいただきましてありがとうございます。

DVDに再録本第一段です。思ったより量が多かったので、内容で分けて全四段くらいになる予定です。楽しみにしていただいた方でお話が入っていなかったらごめんなさい。絶対出しますので、ちよつとお時間ください。

「花吐き病」(2016-09-26)

花吐き病って、すぐスレインに似合うなあって思ったのがきっかけです。

◇イメージソング

「カメラリア」天野月子さん

「ヴァンパイアの恋」(2017-10-26)

ハロウィンネタ一回はしたい！と軽い気持ちで書き始めたら難産でした。調べたと

ころによるとヴァンパイアは招かれないと部屋に入れないそうで、その設定非常に素晴らしいと思います。スレインがいたら招き入れたくてたまらないですよね。

公園で出会った時のスレインはトリルラン（チンピラ）と一緒にいて、その後クルーテオ（大富豪）に飼われてハークライト（マフィア）と住むっていう話考えてたんですけど入りませんでした。その後伊奈スレハーは三人で行動を共にするんですけど最後は伊奈帆が人間のまま二人を看取る感じで終わります。見た目二十八歳伊奈帆×十七歳スレインってやばいな、って思いました。

◇イメージソング

「囚われた光」花江夏樹さん

「Absolute」（2018-3-30）

「Bouquet」（書き下ろし）

ついにうちの伊奈スレにも子どもが産まれました。おめでどう、おめでどう。オメガバースはいいですね。制作中にアルドノア香水の発売が発表されて、フェロモンの香

りの参考にしたのでした。山あり谷ありを一步一步乗り越えてきた伊奈スレを書くことができて幸せでした。

アブソリュート (Absolute) は香水の抽出法の一つで、この抽出法は薔薇とかオレングジの花でする方法 (摘み取った後に香りが失われるから) らしいので、伊奈スレっぽいなあと思いました。

ブーケ (Bouquet) は結婚のシンボルですから、どこかに入れたかったんです。そうしたら「花の香りを混合した香水」って意味もあるそうで、番になった二人と宿った生命に相応しいな、って思いました。

余談ですが「伊奈スレ幸せ家族計画」、考えちゃいました。二人とも家族団欒なんてしたことないだろうから、オメバ世界では幸せ家族してほしいです。ではいきます。

・ローザ・リリア

女の双子 (スレイン似) は三つ編みとポニテ (日替わり) で毎朝伊奈帆がセットする。顔も性格も似てるけど違う服着て髪型も違う。控えめに言って天使。

・蜜柑

男（伊奈帆似）は双子より三才年下。図鑑ばかり見てる。無口。アニメ一期の伊奈帆から料理成分と萌え袖を引き算して、ドアを足で開ける、牛乳をパックで直飲みする、服の釦を掛け違える、などのがさつさを足し算した感じ。ザ・理系男子。眼鏡。

・檸檬

男（スレイン似）は兄より五才年下。お兄ちゃんのあとばかりついていく。成長するとまんまアルドノア学園スレインになる。

呼び方はパパ（伊奈帆）とお父さん（スレイン）で伊奈帆はスレインって呼ぶんだけど、スレインは子どもいるとパパって呼ぶもんだから「パパ、醤油取って」（醤油渡しながら）「君にパパって呼ばれるとなんか。なんか変な気分になってくる」「いい年して大丈夫か」「パパそれ毎日言ってるよね」「朝からやだね」「お父さん、僕も醤油ちょうだい」「本を見ながら食べるのは…」「ごぼした、ティッシュ」「座布団の下。踏んでる」ってなります。ランドセルはハツキネンとユキ姉とアセイラムからそれぞれ贈られました。

◇イメーじソング

「眩暈」鬼束ちひろさん

「愛のメロデー」KOKIAさん

「赤い糸」LesRyん

以前書いた文章を読み返すというのは気恥ずかしくもあり、再録本を出すで大変なんだな、と実感しました。あと、エログロは読むのは大好物ですが自分では苦手分野で、この本は当社比MAXの大人向けとなっておりそれもちよつと照れます。でも好きなのでまたチャレンジしたいです。

四方山話に最後までお付き合いいただきありがとうございました。楽しんでいただけたなら幸いです。

鳴海

Absolute

ゝアブソリュートゝ

(2018-3-30)

名) 絶対的なもの

名) 室温で植物の香りを溶媒に移し抽出した香料